

平成19年度第3回練馬区高齢者保健福祉懇談会 会議要録	
1 日 時	平成20年3月17日(月) 午後1時30分から午後3時30分まで
2 場 所	練馬区役所 本庁舎5階 庁議室
3 出席者	(委員 15名) 冷水座長、東條副座長、岩田委員、佐藤委員、高橋委員、長井委員、町田委員、渡辺委員、佐々木委員、轟委員、永井委員、早船委員、藤田委員、増田委員、松尾委員 (区幹事 12名) 福祉部長、地域福祉課長、高齢社会対策課長、介護保険課長、介護予防課長、大泉総合福祉事務所長、健康推進課長 ほか事務局5名
4 傍聴者	0名
5 議 題	1 高齢者基礎調査の報告について 2 練馬区高齢者保健福祉懇談会における検討課題(テーマ)について 3 検討課題(テーマ) (1) 『高齢者の社会参加』 (2) 『高齢者施設のあり方』 4 その他
6 配布資料	配布資料 (1) 資料1 高齢者基礎調査集計 (2) 資料2 高齢者保健福祉懇談会における検討課題(テーマ) (3) 資料3 検討課題(テーマ)「高齢者の社会参加」について (4) 資料4 平成19年版高齢社会白書抜粋「前例のない高齢社会に向けた対策・取組の方向性」 (5) 資料5 介護保険事業者向けアンケート結果「元気高齢者の介護人材への活用について」 (6) 資料6 検討課題(テーマ)「高齢者施設のあり方」について その他 (1) 座席表・委員名簿 (2) 練馬区老人クラブ連合会パンフレット・会報 (3) シルバー人材センターパンフレット (4) 高齢者センター利用案内(豊玉・光が丘・関町) (5) 敬老館のしおり (6) 東京都地域ケア体制整備構想(閲覧用) (7) 第3期高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画(閲覧用) (8) 高齢者の生活ガイド(閲覧用)
7 事務局	練馬区健康福祉事業本部福祉部高齢社会対策課計画係 3993 - 1111 (代表)

会議の概要

(座長)

第3回練馬区高齢者保健福祉懇談会を開催する。
事務局から本日の配布資料の確認をお願いします。

(事務局)

【配布資料確認】

1 高齢者基礎調査の報告について

(座長)

高齢者基礎調査の報告をお願いします。

(事務局)

【資料1に基づき、高齢者基礎調査結果集計について説明】

(座長)

今後検討していく課題ごとに参考にできるデータが出ているので、活用していただければと思う。

2 練馬区高齢者保健福祉懇談会における検討課題(テーマ)について

(座長)

1回目、2回目と検討課題の整理について検討してきているが、今回検討課題の確認をしたい。練馬区高齢者保健福祉懇談会における検討課題について説明をお願いします。

(高齢社会対策課長)

【資料2に基づき、高齢者保健福祉懇談会における検討課題(テーマ)について説明】

(座長)

当懇談会にて検討する課題項目を整理した。微調整はあると思うが、今説明した課題により議論を進めていきたい。

本日は、課題1の『高齢者の社会参加』と、課題その他のうち、『高齢者施設のあり方』を取り上げる。

3 検討課題(テーマ)

(1) 『高齢者の社会参加』

(座長)

検討課題の『高齢者の社会参加』について、前回までの懇談会の中で、すでに、委員からの発言や区の説明があったが、論点を整理するため、改めて区から説明をお願いします。

(高齢社会対策課長)

【資料3に基づき、検討課題(テーマ)『高齢者の社会参加』について説明】

(座長)

第3期計画において支援を行っている2つの団体について、それぞれの団体の代表として参加している委員からご意見をいただきたい。まず練馬区老人クラブ連合会の話を知りたい。

(委員)

あまり表に出していない話だが、老人クラブでは、社会参加として、ひとりぐらし高齢者の訪問をして、3ヶ月に1回集計を取っている。また、健康増進のために筋トレなど、いろいろなスポーツをして病気にならないような活動もしている。その他、1年に1・2回は、地震などの被災者のため会員の皆さんから寄付をいただいている。赤い羽根共同募金へも10年以上、老人クラブの中だけで毎年70万円のご寄付をさせていただいている。これらの社会貢献活動はきちんとした統計も取っており、会員には会報で報告しているが、一般にはアピールしていなかったため、これからはどんどん出したい。

高齢者でひとりぐらしの方には食事会へ招待をしている。むしろ一番問題なのは家族と住んでいるが、家族が働きにいく日中は一人であるという方だ。小さい子どもさんがいて、学校から帰ってきてしばらくは賑やかだが、ご両親が帰ってくると2階に上がってしまって、1人で下の階にいるということもあるそうだ。家族団らんの中に入っていける方がいいが、そうでない人は、ひとりぐらしの方よりも寂しさを感じるというご意見をよく伺う。そのような日中独居者に対して夕方から夜に訪問ができると良い。

老人クラブに電話がかかってくればいくらでも相談にのっている。1時間以上お話しする方もいる。目に見えないボランティアというのができるようにしたい。入会していただければ、各クラブ内でもっと対応できるが、そもそも老人クラブの取り組みを知らない方が多い。今、老人クラブの取り組みについてのPRを一生懸命やっている。皆さんからも、新たに組み込んでほしい事柄らについての要望があったら、いくらでも取り入れていきたいと思う。

60歳で仕事を辞めた方のために、現在はゴルフの大会や講習をやっている。それから認知症予防のために、マージャン教室をはじめの予定で、現在準備中である。

あとは、ひとりぐらしの方に対して、夜間にこちらからお電話をかけたり、お話に行ったりできるような対応ができるといいのだが、既に日中が繁忙のため、夜までというのは困難だ。NPOなどが協力してくださるようになると良いのではないかと考えている。

(座長)

高齢者基礎調査にも、老人クラブの活動が出ていたが、高齢者の中で自治会や町内会の活動と並行して、老人クラブの活動をしているという人は多い。ただ高齢者全体の割合からいうと5%にとどまっている。既に中に入っている方は、活発に活動をしていらっしゃるのだろうが、そこに入ってこない方々もいるという状況を、今後どうしていくかが課題である。もちろん老人クラブだけが社会参加の手段ではない。社会貢献活動と、自分たちのレクリエーション、趣味を生かすなど、内向けの目標と外向けの目標の両方を取り組んでいるという点が老人クラブの特徴だ。

つぎに練馬区シルバー人材センターについての説明をお願いします。

(委員)

シルバー人材センターの前身は高齢者事業団で、昭和50年に東京都の高齢者対策として、江戸川区に第1号が誕生した。その時合言葉としたのが「働く喜び、社会参加の輪を広げよう」ということで、都内はもちろん全国で運動が行なわれた。練馬区では昭和52年7月に設立された。以来、業績を伸ばし、拡大し続けている。現在の会員数は3,500人だ。都内に68あるシルバー人材センターでは足立区について2番目の規模である。受注件数は年間で1万6,500件程である。

シルバー人材センターは、役所、民間から仕事を請負の形で受けて、会員に再提供する仕組みをとっている。1件1件、契約によって仕事を受けている。受注件数1万6,500件は都内トップである。契約額にすると14億5,000万円程だ。これも都内でトップクラスである。かつては板橋区がトップだったが、練馬区が追いつき、今では毎月トップ争いを演じている状況である。しかし、トップであることは大変喜ばしいが、職員や役員には、「これで安心して満足してはだめだよ。これから勝負だよ。」ということを行っている。なぜかという、60歳定年に達した団塊の世代の人たちが、シルバー人材センターに入会するのはあと数年後だが、今のシルバー人材センターの状態では、受け入れは大変難しいからだ。そこで私が考えている、あるいは全体の合意を得ている課題を3点ほど申し上げる。

1つ目は、シルバー人材センターの事務所は1か所であることである。この1ヶ所で練馬区全体をカバーするのは非常に無理がある。役所からの仕事は練馬区全体にあるが、民間から受託する仕事は、ほとんどが練馬の中心部や西武池袋線、都営大江戸線沿線に偏っている。そのため北町、西大泉、あるいは関町あたりの会員になっても、就業機会が提供できない。少なくとも区内に2・3ヶ所は、シルバーの事業を取り扱う拠点がほしい。足立区は4ヶ所の拠点を持っている。世田谷区、大田区、品川区もいくつかの拠点を持って、シルバーの事業を展開している。練馬は1ヶ所である。これを何とかしなければ将来の展望は開けない。

2つ目は、事務局体制の問題である。現在シルバー人材センター事務局の正規職員数は、局長、次長を入れて7人だ。契約件数は1万6,500件であるが、局長、次長は事務には携わらないので、5人で1人あたり3,300件の契約を扱っているということになる。これは非常にハードである。さらに拡大し、事業を伸ばしていくために、職員数の増強が必要だ。職員数を増やすための補助を区にお願いしたいが、今の区の情勢では難しいだろう。いまの練馬シルバーセンターの実力から言えば、自前で職員を増やしても、1人1,000万円程度の人件費なら、他を節約しても職員を増やすことは可能だと思う。

3つ目は、指定管理者制度の普及による影響である。官から民へ、民間でできることは民間でという時代の流れで、練馬区も指定管理者制度を3年前から導入し実行に移された。しかし、指定管理者制度を実施し、これまで区が運営していた施設が民間へ移った時、シルバー人材センター会員の就業の場がなくなってしまうという実態がある。練馬区だけではなく、全国的に起きている。今後さらに区の事業が民間等へ委託される。それに伴って会員の働いている職場がまたなくなってしまうだろう。指定管理者制度の要綱を見ると、雇用の創設という言葉が入っている。これは結構だが、現に働いているシルバーの会員の

方がその職場を追われている実態をどう考えるのか。東京都、国へといろいろ働きかけているが、ほとんど成果を得ていない。

職員、会員、役員に申しあげているのは、練馬は解決すべき問題が多くある。しかしながら、練馬のシルバーはまだ拡大、発展することが可能だ。万策が尽きたということではないと思っている。

(座長)

それぞれに活動している団体が抱える課題はあろうかと思う。これからの議論の中で個別に取り上げていきたいと思うが、限られた時間で議論をするために少し論点をまとめていく必要がある。社会参加の定義は非常に多様である。どのように整理をするかが非常に重要なので、社会参加の様々な形態について、高齢社会対策課長から説明をお願いします。

(高齢社会対策課長)

【資料4に基づき、平成19年版高齢社会白書抜粋「前例のない高齢社会に向けた対策・取組の方向性」について説明】

(座長)

資料4に示されている方向性に従い、議論を進めたい。シルバー人材センターは主として臨時的で短期的な就業、多くが報酬を伴う活動であるのに対し、老人クラブは基本的に異なるものである。社会参加の活動を大きく分けると、1つは主として高齢者自身、あるいは高齢者の世代の中での活動をより活発にしていく。もうひとつは、高齢社会を支える積極的な活動主体になっていき、社会が必要としていることに対して、貢献していく活動だ。どちらも大切だが、これからの急激な高齢社会を考えると、市区町村が計画を立てて進めていく上で、何が重要かということについて議論していただきたい。

自由にご意見をいただければと思うが、その前に社会貢献の方策について、最近区で行った調査があるそうである。高齢社会対策課長から説明をお願いします。

(高齢社会対策課長)

【資料5に基づき、介護保険事業者向けアンケート結果「元気高齢者の介護人材への活用について」説明】

(座長)

先ほどシルバー人材センターから短期的、臨時的な就労活動が中心だという話があったが、社会貢献になり得る仕事がシルバー人材センターで請け負うもののうち、どの程度あるのか、あるいはどういう課題があるのか。

(委員)

介護人材が不足しているという問題は練馬のシルバー人材センターが抱えている大きな問題の1つでもある。介護保険等の適用にならない方で、手助けを必要とする高齢者、若くてもサービスを受けたい方もたくさんいる。介護も含めた家事援助サービスの分野では、練馬区は立ち遅れている。今後、積極的に取組み、介護保険制度では対象にならない方たちへのフォローをシルバー人材センターで行なっていきたい。他のシルバー人材センターでも実績を上げているところはたくさんある。しかし、むしろ会員がそうした仕事に就くことを嫌がる傾向が非常に強いことが問題だ。いくら人助けた、社会貢献、社会奉仕だと説得しても嫌がる。解決策を講じる必要がある。

(座長)

活発な地域がある一方、練馬では会員自身に介護・家事援助のような仕事を引き受けようという気持ちがまだまだ少ない。この原因・背景についても検討していかなければいけないと思う。

(委員)

老人クラブでは、いろいろな手伝いをボランティアでしている。シルバー人材センターの人は介護だけではないと思うが、賃金をもらっている。利用者からは、何故違うのかという質問が来る。能力が違う、免許を持っているからだの説明はしているが、シルバー人材センターで介護・家事援助サービスへの取組みが増えると、同じトラブルが増えるだろう。

(座長)

老人クラブで行っている家事援助というのは実際のところどのようなものか。

(委員)

クラブの方やご近所の方など懇意の方を相手に、洗濯や、買い物、通院の付き添いなどを行っている。心配なのは、もしどちらかにケガなどがあったときに、誰が責任を取るのだろうかということである。そのため今ではボランティア保険に入っている。

(座長)

積極的な社会貢献をやるうとしているときに、一方はボランティアだが、もう一方は有償である。今後、発展を目指す場合、互いに調整が必要だろうという話だ。ただし、調整が必要なほど、どちらの団体の活動も活発になるというのが前提だ。

2つの団体を中心にお話をいただいたが、他の委員からもお話をいただきたい。

(委員)

最初は有償家事援助サービスを行っていたが、軌道に乗ったので、ボランティア活動にシフトしている。

今は石神井公園の商店街で空き店舗を借りて、社会福祉協議会がやっているボランティアコーナーのようなものをつくったところである。そこで利用者から持ち込まれたアイデアを形にしていくということもやっている。例えばシャンソン教室、太極拳の教室を開きたいという方のお世話をしている。また、地域での活動の仲介的なものもしている。最近は、「溜まり場」をつくりたいという話が出てきた。得意な分野だからお手伝いさせていただいた。場所を借りるから実際にやってみてくださいというアドバイスをした。もう一つは家事援助サービスを手がけているところである。

10年前から団塊の世代向けにいろいろなことをやろうと思いつけて、やっと拠点を作ったところである。特に、男性を中心にした家事援助サービスをやろうとして今準備を進めている。女性による団体は既にあるが、女性中心のため、男性がなかなか入ってこないのので、別に、担い手を男性主体にした団体を作ろうと考えている。

一番の課題はリーダーになる男性陣がなかなか集まらないことだ。呼びかけを続けているところである。

これからの社会においては、元気な方を活用する仕組みが大量に必要なと思う。そのための方策として、ボランティアをすると、代わりに介護保険料を安くするといった提案を新

聞で読んだ。実現すれば、ボランティアに従事する人は爆発的に増えるだろうと思う。他にも、都民税、住民税を安くするとか、世間の注目を集めるような施策がないものかと考えているところである。

(座長)

家事援助サービスは有償か。

(委員)

有償である。2人で従事する形で、1,500円と設定している。2人にワンコインずつ、残りのワンコインは事務所の収入になるという形でやっている。従事者からは、500円では嫌だとか、700円ぐらいほしいと言われているところである。

(委員)

ケアマネジャーをしている。介護業界としては、人手不足が危機的状況で、人材が集まらずに開設されない施設が全都的に出ているような状態である。介護保険制度上の施設なので、人員配置も報酬も決まっている。そのため、人員確保は法令上の人数を前提とするため、きちんと動ける職員の方を希望するといった内容の失礼な話がアンケート回答にも出ていた。しかし、本当に介護の仕事というのは、話し相手から寝たきりの方の入浴介助まで、幅広くある。全ての仕事ができなければ介護に関われないということではない。自分の得意な分野、例えば母の介護をずっとしてきたのでおむつ交換や着替えは誰よりも上手にできるとか、お話を聞くのは誰よりも上手だということであれば、ボランティアとして関わっていただけたらと思う。自分は介護職のプロフェッショナルとして、きちんと介護と関わっていくという意識を持っていただければ、どこの施設でも対応できると思う。しかし、ただ単に、ちょっと時間があいて暇だから介護でもやってみようかと思って、ボランティアや就業をしたいという方は問題だ。アンケート回答にあった「高齢者は高齢者による介護を嫌う」という意見は、そういった意識に問題のある方が介護にあたった場合のことだろう。行政が元気高齢者に介護に関わっていただくということを積極的に行うのであれば、研修などを行っていただいて、参加したい方と受け入れる施設の架け橋的な役割を果たす存在をつくっていく必要があると思う。

(副座長)

シルバー人材センター、老人クラブのお話をいただいた。また地域でのボランティアや、介護業界の状況のお話も伺った。資料5について、短時間でご覧になる時間もないと思うが、ざっと目を通すと多く出ているのは、ヘルパーの補助という、介護保険で切り捨てられた部分を補うような作業を期待されている回答である。お話し相手や散歩のつきそい。デイサービス車両の運転・添乗、デイルームでのボランティア的な接遇といったところか。特技を活かしたレクリエーション指導というのはめずらしい。シーツ交換・掃除・洗い物・草むしり。窓拭きといったものもある。中には無理と否定的に書いていらっしゃる意見もいくつかはあるが、多くのところでは話し相手、見守り、付き添いといったような具体的な作業を書いている。高齢者介護に職業として関わっている方々の回答のため、ヘルパーなり、介護士の方の仕事の補助といった具体的な提案がなされているのだろうと思う。先ほど研修ということをおっしゃっていたが、ただ善意でやれば何でも許される時代ではない。これだけ介護職に関わっているいろいろな専門職が整備されてきている状況下で

は、人と関わる時の基礎的な注意点等を研修を通して身につけていただく。ただ親切の押し売りにならないようなボランティアの育成というのも大事かと思う。今こうやって寄せられている回答をみても、高齢者の方が社会貢献する素地というのはあるのだろうと感じ取れる。

(委員)

高齢者が高齢者の方にみてもらうのが嫌だというのは、話し相手やお買い物ということではなく、身体介護のことだと思う。私も高齢者だが、やはり同じ高齢者の方に見ていただくのは嫌である。医師や看護師、若いヘルパーならいいが、同年代の方は嫌である。そういう意図との回答ではないかと考えている。

(委員)

私もつい最近老人クラブに入会したが、その前の段階として、地域の仲間を作るきっかけが難しい。申請主義の発想で行くと、今まではビラを撒いて、希望者は寄っていらっしやいというような感じでやっていたと思うが、こちらから地域を戸別訪問するところから出発しなくてはならないのではないか。

無感動・無関心・無作為の時代に我々は育ってきた。だから何々をしてくれないという意識になってしまっている。自分から動かない人達のエネルギーが発揮される状況をつくるべきだ。地域の基礎が固まれば、状況は改善されていくと私は考えている。

(座長)

一つ整理しないといけないのは、現在の介護人材の確保が困難であるという問題は、高齢者を活用したらということとは基本的に異なることだと思う。もっと専門的な介護人材をどう確保するかという問題なので、本来の介護労働力をどう育て、育成し、確保していくかということは、別に議論すべきだと思う。ただ、高齢者、特に年を取ってから専門的な介護の人材に参入していこうという人で、60歳から育てるような教育体制を取っていき、65歳を迎えたときに専門的な介護に参入していける人材を育てるとするのは新しい政策ではないだろうか。

アンケートに出てきている意見を東條副座長に整理してもらったが、ここでの話は、基本的に専門的な労働力ということではない。介護保険ではできないような周辺的なことを担う人材としての期待がある。高齢者の社会参加の中で社会貢献として期待できるものはかなりある。どのように組織化し、実施していくかが課題だ。

また、男性はやろうとするけれどもリーダーにはならないという話や、地域の中に、社会貢献に取り組もうという気持ちをどう醸成していくのかという働きかけの問題が課題としてあると思う。

(委員)

高齢者のボランティアとして介護保険施設の話が上がっているが、医療施設、病院でのボランティアも入れていただければと思う。私は病院などでの傾聴を中心としたボランティア活動をしている。施設にはボランティアも目を向けるが、病院のベッド上で生活している、本当に孤独な方たちへの話し相手というのを必要ではないだろうか。認知症になりやすいし、認知症が進行しやすいという現状をなかなかご理解いただけていない。そうしたボランティアの育成というのも必要ではないかと思う。先ほどから問題になっているが、有償ボランティアは日本では非常に力を増してきているが、地域づくり、まちづくりということを考えたときには、住んでいる地域に無償で貢献していくという精神を培っていくこともとても大事ではないかと思う。そしてボランティアを始める前の研修、それから活

動が始まってからのフォローアップ研修というのはボランティアといえども不可欠だと思っている。

(2) 『高齢者施設のあり方』

(座長)

今日のもう一つのテーマ『高齢者施設のあり方』である。高齢社会対策課長から現状だけでなく、これまでに意見として委員から出されているものも整理しての説明をお願いする。

(高齢社会対策課長)

【資料6に基づき、検討課題(テーマ)「高齢者施設のあり方」について説明】

(座長)

先ほどの議論との関連で言うと、高齢者施設には、高齢者センター、法律上は老人福祉センターという施設がある。それから敬老館は、法律上は老人憩の家と言われ、いくつかのタイプがあるが、高齢者自身が自分たちのいろいろな楽しみ、活動を展開する場として位置づけられている。もともとは社会に貢献することが第一の目的ではない。しかし、先に議論したテーマ「高齢者の社会参加」と関連づけることも必要ではあると思う。ご意見を伺わせてもらえればと思う。

(委員)

高齢者施設を私は利用したことがないのでよく知らないが、先ほどから高齢者の社会参加、場合によっては社会貢献へつなげていこうという話がある。そうするとこういう敬老館、高齢センターを自らの楽しみのために行く場としての機能のほかに、世代間交流や社会貢献につなげる活動の拠点にしていくことが必要なのではないか。また、名前を考えて施設のイメージを変えてみてはどうか。

(委員)

私は、豊玉高齢者センターに毎週のように行っているが、非常に勉強になる。元気な高齢者ばかりだが、パソコン講座やいろいろな教室がある。例えば、生け花教室に私も参加しているが、男性は私1人ではない。今の意見もわかるが、役に立つ催しをほとんど無料に近い形でやっていただいているという側面もある。ところで、高齢者センターというのは練馬区では3ヶ所しかない。練馬は広いので、これから団塊の世代が増えるわけだから、新たな施設の開設を急いでもらいたい。

(座長)

若い世代との交流をという話が出たが、前にも話があったが、資料をご覧くださいらわかるように、各敬老館の事業として、例えば資料6 P.2の石神井敬老館では世代間交流事業「年末お楽しみ会」をしている。それからP.3には、西大泉敬老館は現在休館中のようだが、保育園との世代間交流ということでわずかながらそういう取り組みもある。先ほどの発言は高齢者自身の社会貢献ではないが、自分たちの活動を楽しむだけでなく、情報を広く身につけるとか、知識を深めるということもできるというので、社会貢献にならないというだけで、単純に消極的なイメージだけでとらえるべきではないと思う。

(委員)

反対するわけではないが、現在行っている事業だけではいけないのではないかと。もっと新しい要素を取り入れていければ、より活性化するのではないかとという意味で申し上げた。

(座長)

そういうことであれば、いろいろな活動をしたものを地域に還元していくようなことはどうか。例えば陶芸などを行っているわけだから、そこで展示して一部売ったりと、もう少

し積極的に何かをつくって地域に返していく。趣味や楽しみ、自分たちの知識を増やすということと、その成果を地域につなげていくということは考えられると思う。高齢者自身の考え方でしていく必要はあるが、一定の方向付けがされないといけない。いまの敬老館は、建物の運営管理だけを公的にやっているということなので、そこに積極的な役割を果たせるような人を育てていく、ボランティアで入ってもらうなど、自分たちの楽しみだけでなく、地域に返していくことにつながる工夫をしていくということを考えてはどうか。もちろん敬老館、高齢者センターは社会貢献が中心ではないと思う。しかし、そういうものが一部加わっていくと、さっき言った社会参加と高齢者施設のあり方というものがつながりを持っていくのではないか。

(委員)

いま高齢者施設の話もあり、先ほどの老人クラブの話も出てきたが、実際私は、例えば高齢者センターや敬老館があるということは、懇談会に参加して、初めて知った。また、そこで何をしているという細かい話は、今日資料を見て初めて知った。老人クラブは、65歳ぐらいからしか入れないのかな、そのうち70歳からになるのかなと、自宅で女房と話しをするときはその程度の認識で話をしている。

私も61歳になったところだが、定年退職して1年経ってもそれぐらいの状態だから、これから高齢者になるという認識を持つというのは、もっと先にならないと実感できないのではないかという気がしている。やはり区からのアピールをどうやってするかというのが一番大事だと思う。

例えば年金の説明会を受けるというのは、自分が高齢者になるという認識をもつ、一番最初の機会である。ものすごく人が並んでいて順番を待たないといけない。その間、暇で仕方がない。そういう時に、説明を受けられるというサービスを実施してはどうか。

(座長)

言わば広報活動である。確かに今までも、それなりにやってはいるが、高齢者が多いということもあって、なかなか全員には届かないということなのか。

(委員)

先の発言と重複するが、私は年代的には老人クラブにとっくの昔に入れるのだが、地域にこれだけの老人クラブがあるということを今日初めて知った。自分の勉強不足もあるが、そういうものがあって、参加しやすいご案内みたいなものが、もっと早期に受けとる機会があったら良かったとつくづく思った。今日のパンフレットなどは参考にさせていただきたい。

(委員)

私もちょうどいしているが、今度は自分のほうが声をかける段階になっている。私1人ではなく、多くの皆さんがやっているような状態にできれば、大きな組織ができるのではないか。何か力になれないか。

(委員)

敬老館、高齢者センターについて、豊玉高齢者センターは、新しく大変に素晴らしいと聞いている。ところが新しいところはよいが、古い、昔からあるところでは、とても悪い風習だがボスがいる。席の順まで決まっているようだ。そういう風習が嫌なので、私は行かない。そういう風習を直していけばいいのだろう。前にも話したことがあるが、これから改築したり、直した時に、職員の方が慣れるまでは、リーダーになって面倒を見上げるような利用者の方がいればいいと思う。

(座長)

それに類似したことはたくさん聞いている。高齢者センターや敬老館というのは、外面的にも中身的にも変えていくという方向性が必要なのだろう。その手段はなかなか難しいが。先ほどの発言にあった、名称がどうも古くさいのではないかということは、同感だ。高齢者センターというのも一応ニュートラルな、中立的な言葉としているかもしれないが、これから団塊の世代が入ってきて、ちょっと行ってみようかというふうな気持ちになるような魅力的なものにしていく必要があると思う。

(委員)

今の話に関連して、敬老という言葉に抵抗感があると言っていた。私もその世代に達したときに、老人クラブに入るといふ気はしなかった。今さら老人クラブを変えろとか、敬老館の名前を変えるといふことは実際難しいところもあるのではないか。しかし愛称をつければいいのかではないか。何か良い愛称をつけていれば、抵抗感がなく参加できるのではないかと思う。

(座長)

活発なご意見をいただいた。あまりうまく整理ができなかったが、このテーマは重要な項目なので、次回以降、もう一度議論をして、整理ができればと思っている。

それでは最後に次回予定をお願いする。

(事務局)

日程：平成20年4月21日(月)午後1時30分～午後3時30分

会場：練馬区役所本庁舎5階 庁議室

(座長)

それでは、第3回練馬区高齢者保健福祉懇談会を終了する。